



2024年（令和6年）  
8月号（No. 951）

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>  
e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

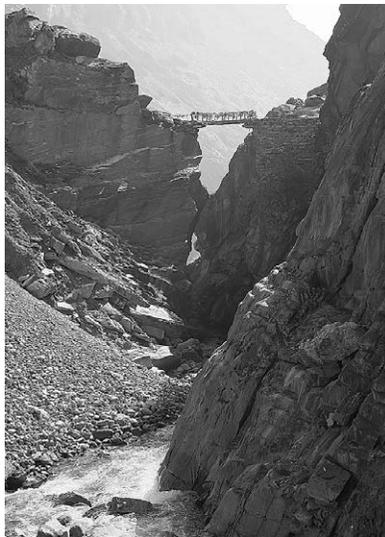
# 創立120周年記念事業 グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅤへ上 慧海師や川喜田隊が足を踏み入れた ネパール北西端のロングコースへ

重廣恒夫

G・H・TステージⅤは、北西ネパールのジヨムソンからガムガディを経てシミコットから北上し、チベット国境のロン・ラ（ラは峠、4933m）に至り、さらに西進してヒルサに向かう約700kmに及ぶロングコースである。行程中には5000mを超える峠の通過がいくつもあるのと、キャンプサイトも全体的に標高が高い位置にあり、高所順応も大きな課題だった。さらに褐色の高地は水源が限られており、そのためか村落の数が極端に少なく、行程中

の宿泊はほとんどテントとなった。期間…2024年4月15日～6月26日（踏査は4月22日～6月15日）  
メンバー…重廣恒夫(76)、吉井修(63)、飯田邦幸(69)、轟涼(67)  
カトマンズではいつものように両替や食料・燃料などを購入し、4月19日、カトマンズ・スタッフ7名とともにチャーター・バスでカトマンズを出発し、ポカラを経て20日、カリ・ガンダキ上流のジヨムソン(2720m)に到着した。ジヨムソン手前のマルファでは、河口慧海

師がチベット入りを目指した1900(明治33)年の3月から6月まで滞在した家(現在は「河口慧海記念館」となっている)を訪問した。  
百丈の橋を渡ってツアルカ村へ  
22日(晴)ジヨムソン～パルヤック(3150m)  
23日(悪天)パルヤック～ピーマ・ロジユン・ラ(4460m)～サンタ(3777m)  
今日の行程は約20kmだったが、途中で山稜からの吹き降ろしの風雪が強くなり、未舗装の自動車道を歩いて這う這うの体でサンタの村にたどり着いた。  
24日(晴)サンタで



上流から見上げた「百丈の橋」

目次

- 慧海師や川喜田隊が足を踏み入れたネパール北西端のロングコースへ……………1
- 高頭祭(7月25日)……………4
- 国際山岳平和祭in長岡2024……………5
- 特別事業補助金の運用報告……………6
- 追悼……………8
- 山の名著再読……………10
- 群馬支部設立10周年記念式典……………12
- 活動報告
  - 山行委員会……………13
  - 図書紹介……………13
  - 新入会員……………16
  - 会務報告……………17
  - ルーム日誌……………17
- INFORMATION……………18
- 編集後記……………19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間  
月～金……………10～20時  
第1、第3、第5土曜日……………10～18時  
第2、第4土曜日……………閉室



鳥葬を彷彿させるハゲワシの群れ。シェー・ゴンパにて

地、4096m)

26日(晴)カルカ〜百丈の橋(4208m)〜カルカ(4823m)

自動車道路を外れて、慧海師が通った旧道をたどる。1時間ほどで断崖の上に架けられた「百丈の橋」に出る。慧海師をして「橋の上に立ちて橋下を望めば、目眩し身寒き感をあらしむ」と記しているが、近年、手摺は付いているものの「天空の橋」を渡る光景は、ほかでは見られない。

百丈の橋を渡り、急斜面を下ると再び車道に合流した。しかし、車道とは名ばかりで、旧道を縫いながら重機で開削された道は急坂の続く未舗装の凸凹道で、ときおり

通るトラクターも、重機で尻を押し上げてもらわないと通過できない場所もあった。アツパー・ドルポの輸送の主役はカツツアル(馬とロバの交雑種)で、ときおり大きな隊列に出会うこともあり、所々に中継基地が設けられていた。

27日(晴)カルカ〜ラプチェ・シヤルマ・パス(5140m)〜ニワス・ラ(5120m)ヌルンスマダ・カルカ(4987m)〜カルカ(4776m)

28日(晴)カルカ〜ツアルカポト(4302m)

長い1日(約18km)であったが、ツアルカポト手前で見たマニ石の長さに驚くとともに、地域の住民の篤い信仰心に感激した。

29日(晴)ツアルカポトでレスト。M.T.C.が通じたので事務局に経過報告。

ツアルカ村は1958(昭和33)年、川喜田二郎隊長の西北ネパール学術探検隊が長期にわたって滞在し、調査や登山を行なった村である。戸数は95戸、人口400人ほど(川喜田隊のときの聞き取りでは34戸・180人)という。探検後に書かれた、川喜田氏の『鳥葬の国』は我々に大きな衝撃を与えた

が、ずいぶん前から火葬や水葬に変わっているという。新地区(ツアルカ)と旧地区(ツアルカ・タシ・リング)に分かれており、間を流れる川には、根深誠氏が尽力された鉄橋が架かっている。

天空の村を越えシェー・ゴンパへ

30日(晴)ツアルカポト〜モラ・ラ(5030m)〜カルカ(4787m)

5月1日(晴)カルカ〜キャンプサイト(4210m)

2日(晴)キャンプサイト〜ティンジェ(4110m)

3日(晴)ティンジェ〜プー・ゴンパ(僧院、4010m)〜シーメン(3850m)

4日(晴)シーメンでレスト。事務局に経過報告。

5日(晴)シーメン〜ナングラ・パス(4260m)〜コマ(4060m)

6日(晴)コマ〜リガン・パス(4470m)〜サルダン(3770m)

7日(晴)サルダン〜ナムグン(4360m)

8日(曇)ナムグン〜セラ・ラ(5095m)〜シェー・ゴンパ

(4343m)

9日(曇)シェー・ゴンパでレスト。

ツアルカからシェー・ゴンパへはいくつかのルートがあるが、我々はモラ・ラを越えてそのままパルジャン・コーラ(谷)を下り、ティンジェ(ティンキュー)に向かった。ティンジェは多くのチョルテン(仏塔)が立ち並ぶ大きな村で、戸数は103戸、人口は400人強という。

ティンジェからさらに川沿いの道を進み、シーメンに到達。シーメンから山道に入りコマに向かったが、ここでも自動車道が開削されており驚いた。しかし、数台のバイクとしか遭遇しなかった。ナングラ・パスを越え、さらにコマからリガン・パスを越えてサルダンに下った。

リガン・パスではスイス人2人を案内しているガイドと馬方、カツツアル5頭に出会ったが、トレッカーでにぎわうネパール中・東部に比べて、このエリアのトレッカーは皆無に近い。アツパー・ドルポに入るにはどこから来ても5000mの峠越えがあるのと、ロツジなどの宿泊施設が少ないこと



チャム・コーラ沿いに点在する冬虫夏草採りのテント群

などが背景にあるのかも知れない。サルダンの村は135戸、人口は500人を超えると聞いたが、その多くは冬の間(約4ヶ月)はカトマンズに移動し、村には動物を飼っている人しか残らないという。サルダンからナムグンに向かうには2つのルートがあるが、我々はドー・タラップに向かう自動車道を少し下ってから、ナムガ・コーラを遡上するルートをたどった。ナムグンは、現在では2軒の家しかない天空の寒村であった。ナムグンからセラ・ラを越えてシェー・ゴンパに到達した。



ハイ・キャンプから5150mのチャンゴ・ラへの登り

立されたというシェー・ス McD. ゴンパの横の広場にテントを張った。シェー・ゴンパでは12年ごとに大祭が行なわれ、今夏がその年に当たり多くの信徒が集まるといふ。また、「鳥葬」を彷彿させるかのような、カツツアルの死骸に群がるハゲワシに出会った。

10日(晴)シェー・ゴンパ↪カルカ(4721m)  
11日(晴)カルカ↪ビジェール(3850m)  
12日(晴)ビジェール↪ヤンブル・ラ(4813m)↪ポー・カルカ下(3664m)  
13日(晴)ポー・カルカ下↪トラ・コーラ↪ポー(4087m)

14日(晴)ポー↪ニンマ・ギャンツェン・ラ(5563m)↪リッジ・パス(5450m)↪リッジ・パス下モレーン台地(5089m)  
15日(晴)リッジ・パス下モレーン台地↪ブン・カルカ北方台地(4762m)  
16日(晴)ブン・カルカ北方台地↪ヤラ・ラ(5414m)↪チャンデイ・コーラ(4830m)  
17日(晴)チャンデイ・コーラ↪峠(4450m)↪タクラ・コーラ(3785m)  
18日(晴)タクラ・コーラ↪ハイ・キャンプ(4350m)7:23↪11:24  
19日(曇)ハイ・キャンプ↪チャング・ラ(5150m)↪タジュチャウル(4050m)  
20日(曇)タジュチャウル↪シレンチャウラ・カルカ(2945m)  
21日(曇)シレンチャウラ・カルカ↪ティヤール(2418m)  
22日(曇のち晴、一時雨)ティヤール↪マンリ(1950m)  
23日(晴、午後大雨)マンリ↪ガムガデイ(2095m)  
ポーからニンマ・ギャンツェ

**冬虫夏草採りの大部隊に遭遇**

ン・ラへの稜線をたどる途中、背後にダウラギリ山群の高峰が見えたが、その後は天気が良くても霞が懸かったような空となり、南面に連なる山々の展望・同定ができなかったのは残念である。

しかし、ヤラ・ラからチャンデイ・コーラのキャンプサイトに下る途中、予想もしていなかった光景が目の前に現われた。5000m前後の山腹で多くの人が地面に這いつくばっていたのである。聞けば冬虫夏草採りと言う。

蛾の幼虫に寄生した茸が地表に芽を出す5月中旬から6月中旬までの約1ヶ月間、ジウムラ方面から家族総出でやって来るのだという。現金収入の乏しい地域とあって、チャンデイの谷だけでも100人以上が入っているそうので、その入り口となるシレンチャウラ・カルカには、これから現地向かう家族のテントが村を埋め尽くしていた。

マンリからガムガデイまでは約35kmもあるので、5kmほど歩いたジープ・ステーションから4輪駆動車を使用した。また、これ以降の輸送はカツツアルになるので、17人のローカルポーターを解雇した。

G.H.T.ステージVの行程図は、次号(9月号)の報告(下)に入れます。

## 高頭祭(7月25日)

第67回高頭祭の開催日の7月25日は、梅雨前線が新潟県下地域にあり朝から猛烈な雨で、準備資材を運搬する「弥彦スカイライン」の時間雨量が30mm以上で閉鎖になり、平地での開催について検討を始めたが、雨もやみ、先遣隊より交通止め解除の報告が入ったことから開催を決定しました。

今年の高頭祭は、「アジア山岳連盟創立30周年記念事業・国際山岳平和祭2024」のメイン行事として高頭祭・新潟県登山祭・た



高頭翁の寿像前で開会挨拶を述べる後藤正弘支部長(中央)

## 越後支部 小山一夫

いまつ登山祭を開催しました。雨上がりの強風下で準備し、アジア山岳連盟加盟国11団体、日本山岳会、日本山岳・スポーツクライミング協会、日本勤労者山岳連盟、国内山岳団体など180名の参加を得て、盛大に挙行されました。

後藤正弘・越後支部長の開会挨拶で始まり、橋本しをり・日本山岳会会長、アジア山岳連盟・李仁禎会長、本間芳之・弥彦村村長、日本山岳・スポーツクライミング協会・蛭田伸一会長など、来賓の挨拶をいただき、献花・献酒などの一連の行事も国際色豊かに、和やかに進められました。

たいまつ登山も、弥彦神社から弥彦駅まで290名が整然と行進しました。参加されたアジア山岳連盟の皆さんも日本の伝統文化を体験し、平和を考える良い機会になったと思います。

高頭仁兵衛翁は、三島郡深沢村(現・長岡市深沢)の豪農の家で生まれました。小学校に入学すると生涯の恩師、大平晟先生の薫陶を

受け、13歳で弥彦山に登り、登山に目覚めました。富士山はじめ苗場山、八海山などを登り、あまりに夢中になったことから母親より登山の危険を諭され、登山禁止を言い渡されました。

その後、小島烏水氏を紹介され、日本山岳会の7人の創立者のひとりになり、第2代日本山岳会会長を務めました。創立時の財政基盤を支えるため、会員1000人分の会費を18年間納入し、日本山岳会の財政を支え続けました。

戦後、農地解放で家は没落しましたが、藤島玄・初代越後支部長はじめ県下の岳人が、高頭仁兵衛翁の功績と遺徳を偲び、初登山の弥彦山山頂に昭和25(1950)年、寿像を建立しました。

また戦後、弥彦神社の「灯笼祭」がすたれたため、当時の宮司より弥彦山岳会・花井馨会長に山岳マラソンなどが提起されましたが、花井会長は藤島支部長や県内の岳人と協議し、明治時代まで行なわれていた雨乞い神事を思い付きました。日照りが続くと弥彦山頂に仮

小屋を作り、雨が降ると仮小屋を燃やしたいまつを持って下山、麓の住民が提灯を持ってたいまつを迎えに行ったという農民事事を再現することになりました。

弥彦山頂「御神廟」の社務所建設で高頭翁の寿像は大平園地に移転しましたが、高頭祭・新潟県登山祭・たいまつ登山祭の一連行事は県内の山岳団体が一つとなり、今年度で高頭祭は67回、新潟県登山祭およびたいまつ登山祭は69回開催し、全国に誇れる新潟県の岳人の行事になりました。



弥彦市街の大鳥居を抜けパレードするたいまつ行列

## REPORT

## 「国際山岳平和祭 in 長岡2024」を終えて

— 日本山岳会の国際交流を再考する —

副会長 桐生恒治

アジア山岳連盟(UAAA)創立30周年記念事業「国際山岳平和祭 in 長岡2024」が7月23〜27日の間、新潟県長岡市を主会場として開催された。

UAAAはアジア13ヶ国・18団体の加盟組織で、日本は日本山岳スポーツクライミング協会(JMSCA)と日本勤労者山岳連盟(JWAF)が加盟しているが、残念ながら日本山岳会(JAC)は現在、



記念式典の冒頭で挨拶する韓国の李仁植・UAAA会長

未加盟である。今回の計画はJMSCAが日本開催の主管となり、昨年11月末、現地イベントでJAC橋本しをり会長に高頭祭参加と高頭翁出身地の長岡市開催に向けて協力依頼があった。

JACとしても、本会創立メンバーのひとり高頭仁兵衛翁を広く海外へ紹介し顕彰する機会と捉え、また、同時開催の弥彦山たいまつ登山祭も、日本の伝統的山岳文化を体験していただくことで国際交流の一助になればと好意的に受け止め、昨年12月の理事会で承認された。JAC窓口の桐生と越後支部が現地担当となり、引き継がれる山岳祭プロジェクトの「Go To 山岳祭」行事とし、山行委員会による守門岳登山を組み入れ、国際交流の一環と位置付け国際委員会にも協力を求めた。

7月26日午後3時から、ホテルニューオオタニ長岡で記念式典が開始され、最初にUAAA李仁植会長(韓国)が挨拶で、「UAAA

は1994年、松本市で開催された国際山岳連盟(UAAA)総会を契機として設立、創立20周年記念事業を広島市で「広島山岳平和祭」として実施、30周年も同じ平和友好宣言都市の長岡市で開催していただき感謝する。現在、世界は大きな国際紛争の中にあり、気候変動や環境変化でも新しい局面を迎えているが、我々アジアの登山界から平和メッセージを打ち出し、何をなすべきか、行動を起こしていきたい」と述べられた。

来賓の花角英世・新潟県知事は、ユネスコの世界遺産登録会議でインド・ニューデリーへ出張のため欠席されたが、お祝いメッセージが披露された。JAC会員でもある佐野哲郎・新潟県教育長、磯田達伸・長岡市長や本間芳之・弥彦村長からも来賓の挨拶をいただいた。その後祝賀会となり、参加者総勢約200名の祝宴に移った。加藤尚登・長岡市議会議長の音頭で鏡開き、越後支部の山崎幸和・橋本正巳両氏の発声で乾杯後、会場の天井全面をスクリーンとする「日本一長岡大花火」のプロジェクトシヨンプギンが始まり、度肝を抜かれるアトラクションに全員で

見入っていた。最後に壇上で多くの国々の山仲間が集まり、「Keep The Peace」のシユプレヒコールで締め、成功裏に終了した。

今回の国際大会で多くの国々の山仲間が、言葉の壁を乗り越え打ち解けて親睦を深め、友好関係を確認し、継続した意義は非常に大きい。JACは創立時から英国のアルパイン・クラブを模範として、登山を通し諸外国との交流を積み重ねてきた長い歴史がある。

特にJACと良好な関係だったインド登山財団(IMF)キールティ・パイ事務局長やスワデッシュ・クマール氏、さらにネパール山岳協会(NMA)ニマ・ヌル会長から、「今後もJACとの関係を継続し、合同登山をプロモートして欲しい」と強烈にプロポーズされた。また、UAAAの李仁植会長やネパール山岳協会前会長のサント・ラマ氏はJAC会員であり、今後も積極的な活動をバックアップする、と約束してくれた。JACの将来を担うYOUTH CLUBや学生部のメンバーに伝えて、海外登山を含む国際交流の基礎をもう一度再構築してみたいと考えている。

## REPORT

## 「特別事業補助金」を運用した

## 事業内容とその結果報告

関西支部 水谷透・豊田哲也

本部から助成される「特別事業補助金」により2021～23年度

に実施した事業「新規リーダー育成と遭難防止・ファーストエイド・山岳気象講座の実施」に関する事業内容とその結果について報告する。

## 事業を計画した背景

(1) 指導的立場の会員の高齢化により、後継リーダー層の強化が必要だった。

(2) 遭難事故が発生しているなかで、遭難防止のさらなる啓発の必要性を感じた。

(3) 遭難防止に合わせ応急手当についても啓蒙する必要がある。

(4) 遭難防止に合わせ気象知識を習得する機会を設けたい。

## 事業の目的

(1) 新たなリーダー層の育成。

(2) 遭難防止対策。

(3) ファーストエイド技術の習得。

(4) 山岳気象知識の習得。

## 事業内容

(1) リーダー養成講習会を開催するとともに、一定の登山経験がある会員に「登山教室」への参加同行を促し、リーダー候補として育成する。

(2) 山岳遭難に詳しい研究者による、遭難防止に役立つ読図山行の実技講習を実施する。

(3) 国際山岳医による応急時のファーストエイド講習を実施する。

(4) 山岳気象予報士による座学と観天望気の講習を実施する。

## 事業の実施状況

① 新たなリーダー層の育成。

(1) リーダー養成講習会の実施回数と受講者数。

・ 2021年度…座学2回17名、実技2回12名、総計29名

・ 2022年度…座学2回26名、実技4回52名、総計78名

・ 2023年度…座学3回24名、実技5回39名、総計63名

(2) 主目的は山行リーダー育成だ

が、登山教室指導者層（講師、アシスタント）の拡充も図る。

(3) 登山教室卒業生を対象にリーダー育成候補として登山教室に参加させ、リーダーシップを身に付けてもらうようにした。また、ベテラン層リーダー資質がある登山教室講師の未経験者を対象に登山教室への補助を依頼し、講師、アシスタントの層を広げる活動を行なった。

(4) 登山教室の実施。

\* 実施回数と受講者数。

・ 2021年度…座学4回35名、初級7回44名、中級7回26名、上級6回18名、総計123名

・ 2022年度…座学4回44名、初級8回50名、中級9回35名、上級8回44名、総計173名

・ 2023年度…座学7回58名、入門6回27名、初級9回49名、中級9回80名、上級9回52名、総計266名

\* 中級・上級は平日開催だったが、2022年度より中級を土日開催にした結果、受講者層が若返



山中でファーストエイド技術の実地講習を受ける

った。

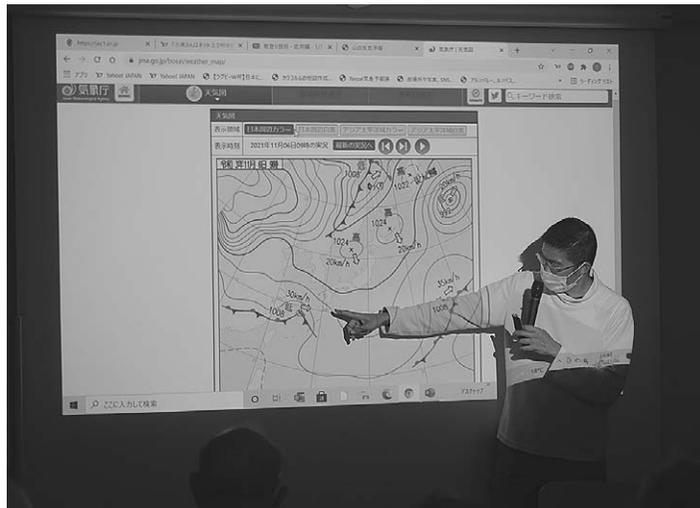
\* 2023年度より新たに入門コースを新設、間口を広げた。

\* 受講者に向けて日本山岳会関西支部入会のメリット（海外登山のノウハウを伝授、沢登りが盛んなど自分の山の可能性が広がる）を示すなかで、入会者の増加を果たした。

② 青山千彰氏（山岳遭難研究者）

による読図講座など、遭難防止対策の講習会を実施。

・ 2021年度…道迷い防止講



猪熊隆之講師による山の天気ライブ授業

**事業の成果**  
 (1)少数ながら登山教室講師陣の育成ができた。  
 ・2021年度…講師は重廣、アシスタントが2名  
 ・2022年度…講師は豊田、アシスタントが2名

・2021年度…ファーストエイド技術講習会1回14名  
 ・2022年度…ファーストエイド技術講習会1回18名

・2023年度…山の天気ライブ授業講義1回24名、実地講習1回17名  
 ・2021年度以降、登山教室受講者から正会員8名、準会員9名が入会した。  
 現役世代の入会も増え、2023年度には、支部会員数が減少から微増に転じた。  
 (4)ユースクラブ、オールラウンドクラブの土台作りの初期段階にこぎつけた。

以前は、登山教室卒業後も入会しない受講者がいたが、魅力ある山行を目指す受け皿として両クラブを立ち上げ、参画するメンバーが順調に集まっている。  
 今後の展開としては、今年度からユースクラブ、オールラウンドクラブの自主運営を通して、支部運営ができる人材の育成を目指す。

習会2回26名  
 ・2022年度…道迷い防止講習会2回13名  
 ・2023年度…道迷い防止講習会2回13名／川の渡り方講習会1回5名  
 [3]江村俊也氏(国際山岳医)によるファーストエイド技術の講習会など。  
 ・2021年度…ファーストエイド技術講習会1回14名  
 ・2022年度…ファーストエ

座。  
 ・2021年度…山の天気ライブ授業講義1回28名、実地講習1回18名  
 ・2022年度…山の天気ライブ授業講義1回18名、実地講習1回18名  
 ・2023年度…ファーストエイド技術講習会1回11名／救命講習会1回10名  
 [4]猪熊隆之氏(山岳気象予報士)による山岳気象知識を習得する講座。  
 ・2021年度…山の天気ライブ授業講義1回28名、実地講習1回18名  
 ・2022年度…山の天気ライブ授業講義1回18名、実地講習1回18名

・2023年度…講師は豊田と中久保で分担、アシスタントが4名  
 ・2024年度…講師は中久保と野村で分担予定、アシスタントは7名の予定  
 (2)運営に参加するメンバーが増え、バリエーション・ルートなど支部山行の多様化が進んだ。  
 支部山行計画数…2021年度70回、2022年度75回、2023年度77回  
 (3)2021年度以降、登山教室受講者から正会員8名、準会員9名が入会した。  
 現役世代の入会も増え、2023年度には、支部会員数が減少から微増に転じた。  
 (4)ユースクラブ、オールラウンドクラブの土台作りの初期段階にこぎつけた。

### 9月開催の山岳祭のお知らせ

#### ●第32回藤木祭

日本山岳会関西支部、日本山岳・スポーツクライミング協会、大阪府山岳連盟と兵庫山岳連盟の共催で開催します。  
 日時…令和6年9月29日(日)13時、開催場所…兵庫県芦屋市・高座ノ滝前。

藤木祭は1989(平成元)年から関西支部と大阪・兵庫山岳連盟の山岳3団体共催で実施されてきました。すでに1963(昭和38)年に彫刻家・佐藤久一朗会員の手で作成された藤木九三氏のレリーフが芦屋川・高座ノ滝横に設置されていて、藤木祭はこの地で、氏の誕生日に当たる9月30日前後の日曜日に開催しています。

近代日本の登山界発展に寄与した藤木氏とロッククライミングクラブ(RCC)を顕彰し、関西西岳人たちの交流の場を提供してきました。なお、今年はRCC発足100周年に当たります。  
 ◆問合せ先…関西支部 ☎06-71611-2252

✉kansai.jac@canvas.ocn.ne.jp



## 山野井武夫さんを偲んで

大倉昌身

ネパール・ランタン谷の入り口  
シャブルベシ。カトマンズからジ  
ープで険しい山道を走ること8時  
間余りのこの村に、私は久しぶり  
にトレッキングをするためにやっ  
て来た。私のスマホが鳴った。立  
教大学山友会の後輩からだ。この  
ヒマラヤの麓に日本から直接電話  
が入るなんて、ひと昔前には考え  
られないことで隔世の感があった  
が、その内容は「先輩の山野井さん  
が亡くなった」というものだった。

# 追 悼

OBITUARY



愕然として声もなかった。

### 山野井武夫(やまのい・たけお)

会員番号4633

- 1934年 栃木県佐野市生まれ。県立  
佐野高校から立教大学経済  
学部入学、山岳部入部  
1959年 日本山岳会ヒマルチュリ登  
山隊に参加。同年、立教  
大学山岳部監督に就任  
1964年 クープ山群東端部、ペタン  
ツェに登頂  
1966年 コーカサス山脈エルブルス  
に日本人として初登頂  
1973年 カンパチェンに遠征  
2007年 日本山岳会栃木支部設立、  
副支部長に就任  
2011～15年 同支部長を務める  
2024年6月4日 逝去、享年90

山岳部で私の5年先輩である。64  
年のバルンツェ遠征、73年のカン  
パチェン遠征で一緒にすることが  
できた。私が立教高校山岳部に在  
籍していた時代から懇切丁寧に指  
導してくださった。ヒマラヤの魅  
力やすばらしさを教えてくれたの  
も山野井さんだった。若いころ一  
緒に挑んだヒマラヤ高峰の登山の  
ことが、次々と頭の中に蘇った。ヒ  
マラヤの山麓で先輩の訃報に接し  
たのも何かの縁かもしれない。

山野井先輩は栃木県佐野市葛生<sup>くさう</sup>  
の造林業、採石業を営む恵まれた  
家庭に育ち、高校時代から登山を  
趣味として近くの谷川岳や那須連  
峰を中心に歩いた。立教大学に進  
み、当然のように山岳部に入部し、  
山を主体とした学生生活を送る。

59年、日本山岳会のヒマルチュ  
リ登山隊に参加したのが、ヒマラ  
ヤ初見参である。64年のバルンツ  
ェ遠征では、ペタンツェ(673  
0m)に登頂した。

立教大学山岳部の発展のためにも  
尽力した。56年の日本山岳会隊  
マナスル初登頂などを契機に50年  
代後半から60年代にかけて、我が  
国は空前の登山ブームとなったが、  
当時、立教大学山岳部は相次いで  
2人の部員を遭難で亡くしていた。  
遭難の教訓を活かし、山岳部の立  
て直しを図るため59年、山野井さ  
んが監督に就任。谷川岳や穂高連  
峰・涸沢合宿に参加し、後輩の育  
成に力を注いだ。

66年には、立教大学コーカサス  
学術調査隊の副隊長としてコーカ  
サス山脈の最高峰エルブルス  
(5642m)に挑み、隊は日本人  
としての初登頂に輝いた。2年後  
の68年にはヒンズー・クシュ学術

調査の先遣隊として西パキスタ  
ン・チトラルで調査・偵察活動を行  
なった。さらに73年秋のカンチ  
エンジュンガ山群カンパチェン  
(7902m)登山は、立教大学建  
学100年と山岳部創部50年の一  
大プロジェクトで、山野井さんは  
登攀隊長の重責を果たした。

2007年、日本山岳会栃木支  
部の設立に当たっては設立発起人  
として尽力し、副支部長に就任。11  
年からは支部長の重責を担い、体  
調を崩され15年に退任されるまで  
の4年間、会員とともに山行を楽  
しみ、ウィットに富んだおしゃべ  
りで支部会員たちを楽しませた。

また、「山の日」の祝日制定にも  
尽力し、13年6月には「山の日」を  
つくりよう！ 栃木集会」を主催者  
のひとりとして開催した。当時の  
栃木県知事や船村徹先生、栃木支  
部会員らを引き、予想以上に多く  
の県民の参加を得た。

山野井先輩は、私の人生の大恩  
人である。大学卒業後の私の後半  
生の道筋を示してくれたと言って  
も過言ではない。私はヒマラヤの  
麓から奥様に電話し、改めて尊敬  
と感謝の念を伝えるとともに、お  
悔やみを申し上げた。

合掌

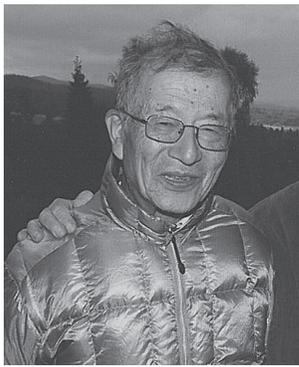
## 岩坪五郎さんの逝去を悼む

酒井敏明

岩坪五郎さんは昭和8年、京都生まれ。京大山岳部に所属し、農学部から大学院農学研究科に進学し、のちに研究職に。森林生態学を専攻し、教授定年後は近畿大学特任教授を務めたのち退職した。京都大学学士山岳会(AACK)会員となり、京大山岳部長、AACK副会長などを歴任した。

私は昭和7年大阪市生まれ。同27年、京大文学部に入学、同時に京大山岳部に入学した。岩坪さんは山岳部の2歳年下組の後輩に当たり、互いに相手を敬愛し合う友誼を結び、爾来六十余年の歳月が流れた。

彼は人付き合いが好い性格の持ち主で、先輩や後輩、同年配の仲間たちから「ゴロー」の愛称で呼ば



岩坪 五郎(いわつば・ごろう)

会員番号4643

1933年 京都市に生まれる  
1954年 京都大学農学部へ入学、同時に京大山岳部に入学  
1957年 現役学生時にパキスタン・スワト地区へ遠征  
1958年 チョゴリザ隊に参加  
1960年 ノジャック初登頂に成功  
1962年 サルトロ・カンリ隊に参加  
1974年 隊長としてK12遠征  
1985年 ナムナニ隊学術班員で参加  
1987年 京大士山岳会副会長に  
1995年 京大山岳部長に  
2010年 ノジャック初登頂50周年記念にポーランド訪問  
2024年5月23日 逝去、享年90

れ人気者であった。京大の山関係には今西錦司、西堀榮三郎、桑原武夫、四手井綱英、加藤泰安、中尾佐助、梅棹忠夫など俊秀の人材が集まっていたが、ゴローを愛し、引き立ててくださった方も多かった。

被占領国日本が国際社会に復帰し、日本人の海外登山は容易に実現できることになる。やがて未踏の空白地はみるみる減少し、めぼしい未踏峰が初登攀されてもビッグニュースではなくなる。こうした日本山岳界の活況に若い山岳部員たちが無関心であったはずはなく、当時の山岳部はまさにその渦中にあった。

有志者部員は、1962年に先輩たちが初登頂したサルトロ・カンリ周辺域に自分たちで遠征したいと考え、未踏だが有望な目標を選んで許可申請し、K12峰の許可を得た。現役部員を統率する隊長

に助手岩坪さんが推戴され、彼は指導教授に相談、教授は許可し、遠征隊が成立した。

隊は資金不足から登攀要員1人を補強できず、一方で地質調査や村人たちの医療環境調査、現地診療のため学術班を編成した。部員2人が初登頂は達成したが天候悪化のため下山途中に遭難、支援隊が後日、最終C4に達して2隊員が帰着しなかったと確認した。C2詰めの隊長はトランシーバーで2人に指示助言を与えた。岩坪五郎編『K12峰遠征記』(中央公論社、2004年)には経緯を詳しく述べ、分析結果が報告された。若い2部員を失った痛手は大きく、リーダーの責任を果たすため彼はこの書の完成に努めたのである。

85年、AACK永年の目標であったチベット高原南縁の秀峰ナムナニ(7694m)の登山が中国から許可され、岩坪さんは学術班に参加して活躍、以後、中国登山協会幹部たちと交流を深める役割を務めた。

彼の山行はそれぞれの報告書に発表されているし、『ゴローのヒマラヤ回想録』(ナカニシヤ出版、2006年)は素敵に面白い。AA

CKの大先輩たちを素描したエッセイを含む落語的人物論や、ノジャック初登頂後の下山時の私との露営中の細かな挿話など、私自身忘れていたものまで教えてくれるのに驚かされる。彼が文才に恵まれていたことを賞揚するに、やぶさかではない。

夫人の玲子さんは歯科医師で、本業のかたわら山にも登る。東カラコルムや西北ネパール、中国・雲南省などの僻地では現地診療をしながら医療事情調査に従事し、成果は余さず公表している。私は仲間数人とともに、しばしば岩坪ご夫妻の手料理を賞味する楽しい時間を過ごす機会に恵まれた。いつかは倍返しすることを夢見ていたが、ホストの急逝で実現できないままなのを遺憾に思っている。

永らく山歩きとスキーで体を鍛えていたゴローさん本人だが、近年は坐骨神経痛などで入院することも稀でなかった。今は入院患者を見舞うことが許されず心配していたが、突然の訃報があったときの驚きは大きく、言葉を失った。岩坪五郎さんよ、異界にあってはも機嫌良くお過ごしください。

連載■文庫本でも楽しめる

## 山の名著再読

⑬『尾瀬と鬼怒沼』（武田久吉著・梓書房）

原 邦三

著者は本会創立会員のひとりであり、第6代会長を務めた武田久吉である。植物学者であり、登山界をリードしたパイオニアだ。当初は植物の探求が主目的だった武田の山登りだったが、その領域は日本登山界において記録的にも画期的なものであった。特に尾瀬・鬼怒沼の紹介は人々を感動させ、当地開拓の先駆的役割を果たす。本書には登山や植物学、環境保護に妥協しない著者の真摯で崇高な姿勢を物語る、6編の尾瀬と鬼怒沼の紹介と紀行が収録されている。

## 【尾瀬と鬼怒沼】

最初の1編は、只見川・鬼怒川



昭和5(1930)年初版発行

流域は深い樹林が覆う、植生の豊かさを魅力とする深山である。なかでも本州最大の湿地・尾瀬ヶ原には稀に見る植物が繁茂しているとする。

## 【初めて尾瀬を訪う】

著者が初めて尾瀬に入山したのは明治38(1905)年、22歳のときだ。きっかけは『植物学雑誌』に載った早田文蔵の「南会津並二ノノ付近ノ植物」。北海道以外では知られていない植物が尾瀬にあると知ったことであった。この紀行を『山岳』第1年第1号に発表すると、尾瀬は多くの人々が知るところとなる。さらに風景画家・大下藤次郎の尾瀬の作品が雑誌『みづゑ』に掲載されると、俄然人気の山域となった。

ルートは日光・湯元を起点に鳩待峠、尾瀬ヶ原を縦断して尾瀬沼へ至り、三平峠を越えて湯元に戻る。尾瀬沼北岸の小池塘群の通過

では《なんとという変化に富む植物景！ そしてまたなんとという美しい風景！ 単に「珍吾巴」を蔵するにとどまらないこの豊庫！ 私はただただ驚嘆してしまつた。つたない筆ではどうてい写すことは出来ない。》と、その感動を綴る。

## 【尾瀬再探記】

『山岳』第19年第1号に掲載した文に加筆したもので、最初の尾瀬入りから20年後の大正13(1924)年夏の山行記。

舟での尾瀬沼周遊や、会津駒ヶ岳の広大な山頂部で景観と花を堪能したことなどが楽しく綴られる。長蔵小屋主人・平野長蔵風致保護運動のパイオニア的存在への絶大な信頼と友情も語る。尾瀬は道が改修され、以前より多くの人が訪れるようになったが、依然神秘境として残されていることに安堵する。一方で地元行政による電源開発構想には強い危機感を抱く。

## 【尾瀬をめぐる】

前回の山行に同行した植物学者・舘脇操が執筆。「学術報告書」として、湖沼、湿原、森林、高原、高山それぞれの場に生育する植物の丹念な調査結果を報告している。学術報告でありながら洒脱な詩的

表現は、読む者を飽きさせない。

## 【春の尾瀬】

5編目は、昭和2(1927)年6月、著者が東京宮林局の依頼で尾瀬に赴いた際の調査日記。2週間に及ぶ調査終了後、福島県庁で尾瀬の真価を語り、その保護に関する意見を述べている。

## 【秋の尾瀬】

昭和4(1929)年「改造」に掲載した尾瀬紀行で、本書の最終編。尾瀬の紅葉は樺平(玉原高原)に劣るか、をテーマに、尾瀬ヶ原、三条ノ滝、尾瀬沼など秋の尾瀬を訪ねる。現地での保護活動を実践する平野長蔵、一方破壊者の水電事業者の存在についても触れる。

平凡社版の解説で、著者と親交のあった山口耀久は尾瀬の変貌を憂え「この本は尾瀬がこうした觀光地になる前の、いわば太古のままの尾瀬の姿をつたえているところ」に大きな価値がある。」と書く。巻末には、著者撮影になる原始の姿をとどめる尾瀬の景観と植物写真が収録されている。

現在読めるものとしては、平凡社ライブラリー(1996年初版発行、税込み1068円)がある。

(図書委員会委員)

## ②4 『山靴の音』 (芳野満彦著・朋文堂)

### 保科雅則

著者の芳野満彦は昭和6(1931)年、東京都台東区に生まれ、14歳で終戦を迎えている。父親は早大教授で根っからの山好き。父とその周囲の山仲間から影響を受けた芳野は昭和23(1948)年12月末、17歳のとき友人と2人で冬の八ヶ岳に向かい、遭難してしま

う。赤岳山頂付近で友人は凍死し、

独り頂上の石室で救助を待つが、

当時は年末年始でも一般登山者は

全く登って来ない。遺書を書いて

死を覚悟するが、遭難して5日後、

奇跡的に救助隊に助けられる。し

かし、足にひどい凍傷を負ってし

まい、両足の先半分を切断するこ

とになった。

『山靴の音』は、この八ヶ岳遭難記から始まる。芳野は遭難事故以降、五文足(約12cm)のアルピニ



昭和34(1959)年初版発行

ストグと呼ばれるながらも国内の冬季初登攀の数々を成し遂げ、さらには1963年、大倉大八と挑んだ日本人初のアイガー北壁、渡部恒明とのマッターホルン北壁日本人初登攀など、精力的に活動していく。

『山靴の音』は昭和34(1959)年発刊の朋文堂の初版以降、長年

読み継がれてきた。愛読者も多く、

少なくとも8つのバージョンが存在する。今回私が手にした『完本

山靴の音』は、2018年に山と溪

谷社から出版された最新版となる。

2002年4月に中央公論新社から

中公文庫BIBLIOとして刊行され

た『新編山靴の音』を底本とし、

朋文堂版から「詩と散文詩」に詩22

編、二見書房版から「徳沢の生活」

に随筆5編、「詩と散文詩」に詩1

編と散文1編を追加、挿画は前述

の3種の版から収録してある。な

かでも「ゴンベ」と雪崩は、犬と

の心温まる登山エピソードで、私

はいちばん気に入っている。

朋文堂の初版『山靴の音』は、両

足先切断の傷がまだ完治しない昭

和25(1950)年冬から7年間、

たった独りで徳沢園の冬の小屋番生活をしていたときに書かれたものである。徳沢入りの動機を「山に

囲まれた環境で精一杯読書し、画

筆を走らせたかったから、それ以

外に何万語を費やしても冬の小屋

番を志した気持ちの説明できない。

徳沢がいいから、いいから、好き

だから、好きなんだ」と、のちに語

っている。

芳野は幼いときから絵が好きで、

クロッキーやデッサンの勉強に励

み、山の絵さえ描いていればご機

嫌だった。そんな芳野にとって徳

沢園の生活は読書と執筆、好きな

だけ絵を描き、また、周辺の山々

を登ってスキーを楽しみ、岩壁を

攀じることがができる最高の環境だ

ったことだろう。

スイス人のモルゲンターレル

(指を凍傷で失った後もアルプス

の登攀を続け、1916年、登山

日記とペン画の画文集『The

Berg』を出版)を愛読し影響を受

けた芳野は、独り徳沢園で執筆と

デッサンを続ける。八ヶ岳の遭難

記録や穂高での足先から出血しな

がらの登攀でも、自身の弱さを素

直にさらけ出す穏やかな語り口と

ユーモアある文章、自然を愛する眼差しの散文詩や挿画を添えて、多才さと人間味が醸し出された、親しみやすい本に仕上がっている。

さらに続編とも言える『アルプ

スに賭ける』(1964年、実業之

日本社)と『われ北壁に成功せり』

(1996年、同)は1950年代

から60年代にかけて、国内の冬季

岩壁初登攀からヨーロッパ・アル

プスの三大北壁を目指した黄金時

代の案内書として、芳野と当時の

クライマーの心情を知ることがで

きる。

身体的ハンディは登攀力に影響

を及ぼして、フォローに徹してい

るが、凍てついた岩壁で何日も粘

るしつこい登攀欲と、ひょうきん

な人柄が仲間から慕われていたよ

うだ。芳野満彦の根底にあった強

い生命力と、凍傷で足先を失った

後も数々の登攀に挑んだモチベー

ションの源は、どこからきたのだ

ろう? そんなことを考えさせら

れた一冊である。

文庫版はヤマケイ文庫『完本

山靴の音』(2018年初版発行、

税込み1019円)で読むことが

できる。

## REPORT

群馬支部設立10周年記念式典を開催  
「骨太の支部」への脱皮を

群馬支部長 根井康雄

群馬支部は2013(平成25)年7月に全国32番目の支部として設立され、今年7月で11年目を迎えた。20人という最少会員数でスタートし、設立10年で会員数では70人を超えるまでに大きく育ってきたが、まだまだ10年。全国の支部の中では比較的年齢層も低いが、その分、山をはじめいろいろと経験も浅い。そんな10年目の群馬支部のテーマは、「骨太の支部」への脱皮。



会場ホテル入り口に設けられた記念式典の受付

そのため支部では、昨年夏から様々な10周年記念行事を行ない、支部の「足腰」を鍛え、ネットワークを広く張り巡らせることに主眼を置いてきた。その主なものとしては、8月の北海道支部との交流山行(大雪山・旭岳)、11月のダウラギリI峰南東稜BC(1978年群馬岳連隊)へのトレッキング、そして、9月にはコロナ禍で中断されていた全国支部懇談会を水上温泉と谷川岳山麓で復活開催し、160人の参加を得て盛大に開くことができた。

これら一連の記念事業の締めくくりとも言えるのが、この6月29日、高崎市内のホテルで開かれた「群馬支部設立10周年記念式典」だった。当日は本部から橋本しをり会長、松田宏也理事、そして福島千葉、山梨など近隣支部をはじめ、県内から群馬県山岳・スポーツクライミング連盟の吉田直人会長、群馬県勤労者山岳連盟の清水隆次会長、日本山岳会の第3代会長で、群

馬県出身の木暮理太郎の顕彰活動を地元元田市で続けている「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」から浅海崇夫事務局長らが参集された。

そして、支部草創期を支え、発展の礎を築かれるも残念ながらとにも故人となられた田中壯吉・初代支部長夫人の田中千枝子さん、北原秀介・第2代支部長夫人の北原和美さんも駆け付け、群馬支部会員を含め40人が集い、10周年の締めくくりを幅広い仲間たちと共有することができた。限りある時間ではあったが10周年を皆で祝い、これからの10年、20年に向けて盛り上がった、意義ある「誕生日」となった。

午後3時からの式典では橋本会長の心温まる祝辞に続いて参列者の自己紹介が行なわれ、それぞれに山への想い、群馬支部との関わりなどを語り、和気あいあいとした雰囲気の中、時間の経つのも忘れるほどだった。

式典に続いて、創立時の事務局長で田中壯吉・初代支部長とともに支部設立に尽力された八木原啓明・元日本山岳協会会長の記念講演が行なわれた。今だから語れる



記念講演をする八木原啓明・元日山協会長。右手前は橋本しをり会長

裏話も披露され、ときには皆で爆笑しながらその興味深い話に耳を傾けていた。

午後5時からは祝賀会へとモード・チェンジ。アルコールが入ると、テーブルを越えて大輪の花が開くように談笑の輪が広がり、楽しい時間をともに過ごした。有志たちはさらに日にちが変わるころまで二次会へ。

36ページの小冊子ながら、群馬支部10年の歩みをまとめた『設立10周年記念誌』もこの式典に合わせてまとめられ、当日、参加者に配られた。記念誌は、のちほど本部や各支部へも送る予定になっている。

# 活動報告

## 山行委員会

### オーナーのホスピタリティが光る 赤倉ユアーズ・イン

妙高山が、目の前に遮るものもなくドーンとそびえる。オーナーの小笠原辰夫会員は、ある企業の保養所予定地だった隣地が売りに出ると、その広い土地をすぐに買い取ってしまったそうだ。「ここに建物が建ってしまったら、妙高山が見えないでしょう」なんとも豪気なオーナーだ。子どもどものころ、将来は山小屋の親父になると決めて、そこからブレずに今日まで、と聞くと隣地を買い取るくらいは当然の意思決定なのだろう。セブンサミツもバックカントリ―もその一直線上にあったのだ。料理上手の奥様や、スキー名手のご子息、可愛らしい双子のお孫さんたちに囲まれて、にこやかにし

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。



赤倉ユアーズ・イン前で

ておられるが、大好きな環境の中で、好きなことに没頭して、心底から楽しんでおられるのだろう。

今回は、長野駅にマイクロボスでお迎えいただき、戸隠の蕎麦の名店、知る人ぞ知る蔵の畑、蕎麦の工場をご案内いただき、さらに、翌日は斑尾山ハイキングのガイドと大サービスであった。この間のすばらしいホスピタリティに今回14名の参加者は喜び、楽しませていただいた。オーストラリアから来て40泊もしていく外国人もいるとのことだ。人の楽しんでいる姿が、この方の喜びなのだろう。ま

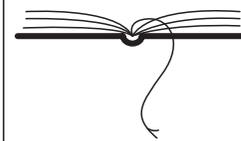
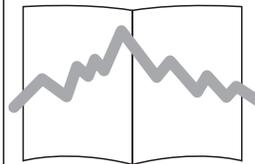
さに本物のホスピタリティがあふれている、居心地抜群のユアーズ・インであった。

後日、小笠原さんから、「皆様のお陰で私も楽しい山行ができました

た。なんらかのご縁で皆様とお会いすることができました。ありがとうございます。もううれしいうれしいメッセージをいただいた。

(高橋努)

## 図書紹介



石川美子著

### 山と言葉のあいだ



2023年11月プロ  
ベルリ判 288頁  
四六判 2600円+税

「山道をゆつくりと歩いてみると、なつかしい人の言葉をふっと思い出すことがある。静けさのなかで目にする草花や、曲がりくねった道、はるかな山々が遠い記憶をさそいだし、そつと差し出してくれるかのようだ。」書き出しの一節だが、こうして、忘れていた記憶の

引き出しが開かれて、思いがけず呼び起こされた想い出や情景の連鎖が綴られる。本書はそれらを取めた随筆集だ。著者は、ロラン・バルトなどのフランス文学を専門とし、美術史関係の好著書もある研究者だが、山が好きでクライミングもたしなむ。

目次を示せば、「遠い記憶の引きだし」、「ラスキンの石の隠れ場」、「セザンヌの山とミヨ―家の庭」、「沈黙の修道院と黒い鳥」、「デュマの熊のステーク」、「シャモニーの裏山のフキ」、「白いアルヴ川と荷風の物語」、「名前とは最後のため息」、「故郷の山に帰るスタンダール」、「山を生きる人たち

の言葉」「静かな背中の中の本」の11の章から成り立つ。目次にあるような19世紀のフランスやイギリスの文学、芸術関連の人々にまつわるアルプスの山々を取り上げて、著者の心に浮かんだ山と文学の随想が語られている。

これを見るだけでも、話題が豊富でバラエティに富んでいることが分かるだろう。「熊のステーク」は、スイスの山あいのレストランで熊肉料理が供された話だ。とんでもないことだとスキヤンダルになつたらしいが、日本では昔から熊肉は珍重されていて、そのギャップが面白い。「荷風の物語」では、アルプスの氷河の水を集めて流れるアルプ川に沿って、水源から始まり、下流のジュネーブでローヌ川に合流、南仏を通つて地中海にそそぐ行程をたどっている。そこに、やはり川を愛した永井荷風への追憶が寄り添い、故郷の川に対する想いが重ね合わされている。こうした絶妙なトピックを見つけ出してくる発掘の才には感心するばかりだ。

ただ、自分自身が登った山行そのものを語る部分はそれほど多くない。シャモニの岩場でクライミ

ングをしたりはしているのだが、ごく簡単に触れられるだけでルート名さえも書いていない。本書の場合、山行の紀行を期待するのではなく、山の文学散歩とでもいった形で味わうのがよさそうだ。

といつても、決して専門書ではないし予備知識などはいつさい要らない。それこそ、知らない山道を歩いていて思いがけない景色を発見するように、著者の文学史や美術史の造詣に誘われて読み進めれば、心に響く素敵な言葉の情景と出逢えるはずだ。

山には登るだけでなく、眺める喜びもあると言われるがもつともなことだ。さらには、山について書かれたことを読む楽しみも付け加わる。こうした山の楽しみ方を著者は思う存分実践していると感じた。

最後の章は、いわゆる亡き父との想い出の山について書いたものだが、ふと田中澄江の『花の百名山』のことが頭に浮かんだ。彼女も父との山の記憶を大切に語っていたが、本書の著者の父親も山と花を愛した人だった。そして、一度だけ連れて行ってもらった山行で父親が語り掛けた「あれが剣山だ」

という言葉がよみがえってくる。これが、著者にとつて「山と言葉のあいだ」に分け入りながらたどりゆく、山道への扉を開いてくれるひとと言ったのかもしれない。

(飯田年穂)

小野健／吉田智彦共著

## アルプスと海をつなぐ 海新道



2024年3月 344ページ  
山と谷 1300円＋税

つがみ  
梅海新道——北アルプスの朝日岳北側、吹上のコルを起点にして親不知まで延びる登山道。一般的な行程では2泊3日のコースで、その標高差は2418m。その名は全国に知られているが、行程の長さとしてスケールアップの少なからず超健脚向きと言われている。そんな長大な登山道を開いたのが、著者の小野健氏を中心とした「さわがに山岳会」だ。

さわがに山岳会の仲間、黒姫山山腹で石灰石を採掘していた職

場の仲間たち。時代は初登攀とか海外遠征に懸命になっている山岳会が多かった1961年、採掘場を開発するためのヤブ刈り測量技術を使って他人のやらないことをしようとする登山道の伐開を決意した。著者は仕事でこの山域を毎日眺め、植物の多様さ・コースのすばらしさを知っていたため、全く未開のまま登山道がないのは不思議ではないか、登山道を開拓して心ある登山者に解放しようではないかという思いも、登山道伐開の夢を後押しした。

著者の小野健氏の印象は、統率力に優れた、優しく少し不器用さもある山男。著者の語り口は、お茶目で楽しく人間味あふれており、読み進めるとその人となりに惹き付けられる。著書では梅海新道開通までには様々な困難・失敗があったことが著者の自然体な語り口で語られ、まさに地を這うようにしてこの偉業がなされてきたのだとしみじみと感じさせられる。遭難騒ぎ（JAC越後支部創立20周年記念事業として行なった新潟県全域の県境踏査計画）や盗伐容疑騒ぎも乗り越え、奥様との馴れ初めの話なども微笑ましかつた。

ナタで山を切り拓く屈強な著者だが、山への知識、自然へのまなざしがとても深い。

梅海新道の大きな特徴は0〜3000mの植生分布だと言う。海岸線の暖温带(常緑樹)から始まり、中温带、冷温带(落葉広葉樹)、亜高山帯(針葉樹林・森林限界広葉樹)、亜寒帯(高山植物帯)へと高度により変化する。その上、地質地形、積雪量などに影響されての植生の変化もある。当地域には、日本の高山植物の7割くらいの種類が分布していると言うから驚きである。一方、地質をとってみても日本海に向かい地層が新しくなっており、地形の特徴や四季の変化など、超一級のアルプス風物詩に接することができるだろう、と語る。

また、自然へのまなざしにおいても、ひょうたん池でカエルの成長を見守ったり、山で出会ったクマと相互にその存在を認め合い、相手にクマ語? でドングリやヤマブドウのある場所を教えてあげたというから、人並みならぬ自然への深い敬愛を持っていたのだと感ぜられる。

1961年にさわがに山岳会と

一緒に生まれた登山道開通の夢は、71年に全線開通し現実のものとなる。登山道伐開作業は著者の人となりもあり、「ベニズワイ山岳会」「カタクリクラブ」へと広がりを見せ、今も登山道維持を様々な団体が引き継いでいる。

著者は「梅海新道は山と海をつなぐ。山と人をつなぐ。人と人もつなぐ。」と語っている。道は誰かが通い続けなければ消える運命にある。夢の登山道はこれからも色々な人たちがつながりながら、登山者たちを迎え入れてくれるだろう。そして、私たちもまずは身近な所から、登山道整備のボランティアなどに参加してみるのもいいだろう。きつと著者の夢の一端を見られるはずだ。

最後に私自身、梅海新道と言えれば思い出されることがある。

大学1年の夏合宿。剣岳から親不知への縦走の最終日。日本海が見えた途端、先輩が豹変した。「自分の殻を破ってみないか。」というキザなのか理不尽なのかよく分からない言葉を掛けられ、日本海まで一気に駆け下った。下るにつれて上がる気温。湿度も上がってきた。なぜ私はこんなことをしてい

るのかよく分からなかったが、これが大人になるということなのか、となんとなく思った。人を豹

## 第40回図書交換会開催と 出品図書募集のお知らせ

図書委員会では、来年2月1日(土)にルームにて図書交換会を行います。本来なら手に取って申込み願うのが最善ですが、年次晩餐会とは異なる日にルームで開催するため、遠方会員の皆様にお越しいただくのは難しいと思います。申込みは郵送やファックス、インターネットでできますし、抽選会場の模様はネット中継する予定です。

つきましては、会員の皆様には交換会に向けて、お手持ちの書籍の出品をお願いいたします。書籍の周りに処理に困っていたり、書棚で眠っている書籍があるのでないでしょうか。

いま、山岳書の散逸を防ぐことが求められています(『山岳VOL.118 神長幹雄著「山岳書が危ない―散逸の危機」参照)。図書交換会はその有効な手段の一つでもあるのです。日本山岳会の歴史を振り返ると、山岳書が山の文化面で大きく貢献してきました。これを継承していくことは会員の役割とも言えます。ぜひ

変させるほどの魅力・魔力がきつと梅海新道にはあるのだろうか。(豊泉仁美)

ひご協力をお願いいたします。

出品に当たっては以下のようにお願いいたします。お名前、会員番号を明記し、「日本山岳会図書委員会」宛にお送りください。締切は9月末です。ただし、雑誌類は出品対象外です。送料は大変心苦しいのですが、ご負担をお願いいたします。なお、山岳会図書室に収蔵されていない図書は図書室で受け入れれます。

・本の収益は、発送などの経費を除き山岳会に寄附いたします。

・受け入れた図書リストを「山」11月号やHPに掲載し、年内にご希望図書のお申込みをしていただくスケジュールです。そして、開催当日来場された会員のお申込みと合わせ、複数申込みとなった図書は抽選で購入者を決定いたします。

すでに会員やご遺族からの寄贈図書が届いており、なかなか手に入らない書籍を廉価で購入できる良い機会です。多くの会員の方々からの出品協力をお待ちしています。

●問合せ先Ⅱ図書委員会委員  
荒井正人

電話：090-7719-7855

メール：nastatoryama@gmail.com

## 図書受入報告(2024年6月~7月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
山本正嘉	登山と身体の科学:運動生理学から見た合理的な登山術	272p/18cm	講談社	2024	著者寄贈
東近江市西堀榮三郎 記念探検の殿堂 編	西堀榮三郎の南極・山岳・品質管理:探検的精神で「未知」を切り拓く	224p/22cm	サンライズ出版	2024	発行者寄贈
杉山修	蒼い山稜:木版画 杉山修	143p/27cm	杉山修(私家版)	2024	著者寄贈
杉並ワンダーフォー ゲル倶楽部 編	渡り鳥:倶楽部創立70周年記念号92	426P/30cm	本の印刷工房	2023	個人寄贈
ベルニナ山岳会 編	BERNINA(ベルニナ)75・76合併号:細谷敏男追悼特集	164p/26cm	ベルニナ山岳会 デザインエッグ 株式会社	2024	発行者寄贈
溝手康史	登山道を誰が管理するのか:登山道の管理責任の現状とあり方	188p/19cm	二見書房	2024	著者寄贈
石田良恵	一生、筋トレ:笑顔あふれる高齢者でいるために	144/21cm	二見書房	2024	著者寄贈
柴田佳英	街・野山・水辺で見かける 野鳥図鑑	384p/18cm	日本文芸社	2024	出版社寄贈
大阪大学山岳会 編	温故起新 阪大山岳会誕生前史:大阪大学山岳会75周年記念誌(その1)	131p/26cm	大阪大学山岳会	2024	編者寄贈
長谷川哲	新 夏山ガイド:道東・道北・増毛6	312p/19cm	北海道新聞社	2024	出版社寄贈
深田クラブ 編	深田クラブ会報:創立50周年 第100号100	120p/26cm	深田クラブ	2024	編者寄贈
北大山岳部・北大山の 会 編	北大山岳部の30年:1995~2024年	25p/30cm	北大山の会 山岳 館運営委員会	2024	個人寄贈
葉室和親	若き儒学者 九州をゆく:葉室黄華の紀行文	282p/22cm	明德出版社	2024	著者寄贈
山崎哲英	犬ぞりて観測する北極のせかい:北極に通い続けた犬ぞり探検家が語る	128p/19cm	repicbook	2024	個人寄贈
広渡敬雄	句集 風紋	196p/20cm	角川書店	2024	著者寄贈
鈴木正崇	日本の山の精神史:開山伝承と縁起の世界	459p/20cm	青土社	2024	出版社寄贈
渡辺豊博/村申仁三 郎	富士山を壊すのは誰?:「富士山登山鉄道構想」が観光立国日本をダメにする	240p/19cm	泉町書房	2024	出版社寄贈
菊地俊朗/上條敏昭	世紀を超えて 上高地牧場から…徳澤園へ:徳澤園140年史 1885-2024	192p/21cm	氷壁の宿 徳澤園	2024	著者寄贈
長岩嘉悦	我が人生に悔い無し	42p/27cm	イズミヤ印刷	2024	著者寄贈
長岩嘉悦	山と友(共)に歩いて70年	142p/26cm	雄物川印刷	2019	著者寄贈
曾布川善一	10万年の噴火史からひもとく 富士山:変わり続ける富士山の今がわかる	128p/26cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
斉藤政喜	シェルパ斉藤の山小屋24時間滞在記	312p/21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
桂木優	41人の嵐:台風10号と両俣小屋全登山者生還の一記録/ヤマケイ文庫	240p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
小林泰彦	日本百低山/ヤマケイ文庫	608p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
今野保	アラシ:奥地に生きた犬と人間の物語/ヤマケイ文庫	249p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
山本茂実	喜作新道:ある北アルプスの哀史/ヤマケイ文庫	496p/15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
JAMES T.LESTER	RETURN TO THE SCENE OF THE CLIMB	245p/24cm	Bench Press	2023	購入



### 令和6年度第4回(7月度)理事会 議事録

日時 令和6年7月11日(木) 19時

00分～21時02分

場所 集会所およびオンライン  
(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生・

飯田副会長、長島・南久

松・平川各常務理事、松

田・川瀬・望月・原田・

猿渡・久保田各理事、石

川・清登監事

【欠席者】池田理事

【オブザーバー】節田「山」編集人

#### 【審議事項】

1・広報委員会と東京支部設立P  
Jの担当理事、業務執行理事につ  
いて(長島) (賛成13、反対0)

広報委員会の業務執行理事・永田  
副会長、担当理事・久保田理事

東京支部PJの業務執行理事・平  
川常務理事、担当理事・松田理事

# 会務報告

2・海外助成金申請の件(桐生)  
(賛成13、反対0)

学生部プンギ遠征隊に支給を決定

3・コーカサスの桜に関する提案  
(長島) (条件付き賛成13、反対0)

JICAジョージア支所への協力

依頼書の発信について承認

#### 【協議事項】

1・理事会関連の年間スケジュール  
について協議した(長島)

2・委員会連絡会議の開催につい  
て協議した(長島)

3・支部行事への理事会からの参  
加者について協議した(桐生)

4・高額寄付者への会長功労賞の  
贈呈について協議した(長島)

5・山岳4団体懇親会への参加に  
ついて協議した(橋本)

6・山岳事故、事件(バワハラ、セ  
クハラなどを含む)などへのリス  
クマネジメントの対応について協  
議した(永田)

7・創立120周年記念行事に向  
けての対応(何をどのように準備  
するかなど)について協議した(永田)

8・グレート・ヒマラヤ・トラパ  
ース報告会について協議した(長  
島)

9・UAAA長岡大会(国際山岳  
平和祭)への対応について協議し  
た(桐生、長島)

10・常務理事会の話題(今後の理  
事会など少し先を見て)について  
協議した(長島)

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

2・寄附金および助成金受入報告  
(南久松)

3・東京支部設立の進捗報告(松  
田)

4・山の日全国大会への参加につ  
いて(久保田)

5・講演会「雪崩から身を守るた  
めに2024」の後援名義依頼(平  
川)

6・「雪崩サーチ&レスキュー講  
習会AVSAR」の後援名義依頼  
(平川)

【その他】

1・会報「山」7月号の進行につい

### 会報「山」の目録と白本 のお知らせ

会報「山」は50号ごとに「目  
録」を作成していますが、現  
在901～950号までの  
目録を作成中です。でき上が  
りは11月の予定です。ご希望  
の方はハガキまたはFAX  
03-3261-4441、  
03-3261-4441、  
✉ [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)で事務  
局までお申込みください(4  
00円・送料込み)。

この目録は、本会ホームペ  
ージからダウンロードも可  
能です。また、これまでどお  
り、50号ごとの会報合本もお  
引き受けします。詳細は会報  
「山」10月号にてお知らせし  
ます。(事務局)

### ルーム目誌 7月

2日 広報委員会 スケッチクラ  
ブ

3日 山行委員会 東京多摩支部

4日 常務理事会 YOUTH

CLUB委員会 山岳地理

クラブ

5日 入会説明会

- 6日 記念事業委員会（コーカサスの桜）
- 8日 アルパインスキークラブ
- 9日 アルピニズムクラブ
- 10日 フォトクラブ
- 10日 財務委員会 山想クラブ
- 11日 かつぱの会
- 11日 理事会 九五会
- 12日 記念事業委員会（コーカサスの桜） 図書委員会 登山講習会
- 16日 麗山会 沢登り同好会Ⅱ
- 16日 アルピニズムクラブ
- 17日 東京多摩支部 平日クラブ
- 17日 つくも会
- 18日 科学委員会 山遊会 アルパインスキークラブ（幹事会）
- 19日 自然保護委員会
- 20日 アルピニズムクラブ
- 22日 総務委員会 緑爽会
- 24日 子どもと登山委員会
- 25日 記念事業委員会（グレート・ヒマラヤ・トラバース）
- 26日 学生部
- 26日 関西支部
- 29日 東京支部設立プロジェクト
- 30日 記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）

7月来室者 273名

### 会員異動

#### 物故

- 木崎甲子郎(4024) 22・2・26
- 宮本忠直(9663) 22・3・31
- 高橋忠雄(12003) 24・7・17
- 牧田一雄(13652) 24・6・16

I N F  
O R M

インフォメーション



A I  
O N

### ◆田部井淳子さんを偲ぶ命日登山

埼玉支部

日高市にある日和田山から物見山を往復します。「南関東プロック3支部合同懇親山行」の行事ですが、今回は従来の東京多摩支部、神奈川支部の皆様、首都圏所属の会員の方々ほか、多くの皆様のご参加を募ります。

日高市にある日和田山・物見山は、2016年10月20日に亡くなった登山家の田部井淳子さんが晩年、リハビリでご主人とよく歩かれていた山です。毎月20日の月命

- 久保田宣夫(4321) 信濃
- 佐々木博昭(9314) 四国
- 西畑 武(10343) 静岡
- 中山芳男(12139) 石川
- 澤田幸子(16274) 関西
- 萩原公平(16442) 群馬
- 吉住琢二(17122) 北海道
- 河田道子(17144) 岐阜

日にはご主人の政伸さんをはじめ、田部井さんを慕う方々が正午ごろ物見山に集まりひとときを過ごします。今回の懇親山行当日は田部井淳子さんの本命日でもあり、たくさんのご参加をいただければ幸いです。

**日程** 10月20日(日) 雨天決行  
**場所** 日高市・日和田山(305m)・物見山(375m)  
**集合** 西武池袋線・高麗駅前広場 10時集合  
**行程** 高麗駅(10時15分発)↓金毘羅神社、日和田山(11時15分

着―物見山(12時昼食など)―日和田山登山口(14時ごろ解散予定。下山路はいくつかあります)

周辺見所 巾着田、高麗神社、聖天院など

募集 埼玉支部事務局長・林までご連絡ください。

締切り 10月6日(日)  
 問合せ 埼玉支部事務局長・林

信行 takenok001@gmail.com  
 080・2256・4829

### ◆会員の宿を訪れる山旅シリーズその4「ロッジ山旅」

山行委員会

長沢洋さん(会員番号12069)が営むロッジ山旅は、八ヶ岳の麓・甲斐大泉にたえず静かな宿です。案内には山旅の名のとおり、「山や高原を歩く人のベースキャンプです」とあります。日本山岳会会員で気鋭の山岳画家3人(北島洋一、中村好至恵、すがぬまみつこ)の作品がギャラリーに集結しています。山と芸術の香りに満ちたロッジで、豊かなひとときを楽しみませんか。

**日程** 10月24日(木)〜25日(金)

集合 10月24日(木)10時40分JR清里駅集合(予定)

行程 1日目||飯盛山ハイック2日目||美しい森散策など

参加費 1万2000円

定員 10名(申込みは9月30日まで)

申込み先 高橋努 ☎090・2906・4356

✉sanko@jac.or.jp

\*保険加入のため生年月日をお知らせください。

\*集合場所など詳細は参加申込みにご案内します。

◆第30回高尾展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

国内外で撮影の2023年度作品展を高尾で展示します。併せて過去30回を振り返った展示なども行なっています。

気候の良いシーズンなので、高尾山にお出かけの折は、ぜひ立ち寄りください。

会期 10月8日(火)~14日(月) 8時~17時 \*最終日は13時終了

会場 東京都「TAKAO599 MUSEUM」☎042・665・6688 京王電

鉄(京王線 高尾山口駅から徒歩約4分)

問合せ 田口克彦 ✉taguchi@nyg.biglobe.ne.jp ☎090・8034・2003

花澤廣巳 hanzawa-hirumi@xg8.so-net.ne.jp ☎090・7827・0155

◆石崎光瑤生誕140年記念展

主催||開催各美術館、毎日新聞社

石崎光瑤は、鮮やかな色彩で華麗な花鳥画を数多く残した近代京都画壇の日本画家です。また、本

会会員で、明治42(1909)年、登山者として初めて剣岳に登頂したパーティの一員でもあります。

本展は生誕140年を記念して、官展出品作を中心に初期から晩年に至る作品を展観する大規模回顧展です。展示構成は1章||画学修行と登山 2章||インドへの旅、

新しい日本画へ 3章||深まる絵画表現の探求、4章||静謐なる境地へ、に分けてその作風に迫ります。

展示は、南砺市立福光美術館、京都府京都文化博物館、静岡県立美術館でそれぞれ約2ヶ月間行ない、巡回します。

●南砺市立福光美術館展

会期 7月13日(土)~9月2日(月)

〒936-1626 富山県南砺市法林寺2010 ☎0763-5217576

●京都府京都文化博物館展

会期 9月14日(土)~11月10日(日)

〒604-8183 京都市中区三条高倉 ☎075-252212975

●静岡県立美術館展

会期 2025年1月25日(土)~3月23日(日)

〒静岡市駿河区谷田53-2 ☎054-263-5857

◎毎日新聞社大阪事業本部事業部 ☎06-6346-8391

訂正

・会報7月号3ページ3段目「質疑応答」記事、「俵屋守男会員」とあるのは「俵山守男会員」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

・会報7月号6ページ4段目「ウエストン祭」記事、「第26回(1972年)」と第49回(1972年)の誤りでした。訂正させていただきます。

〈会報編集委員会〉

◆編集後記◆

●7月下旬は剣沢小屋へ遊びに行きました。「剣の大將」と呼ばれた名ガイド・佐伯文蔵さんを初代に、二代目でグルジャ・ヒマール初登頂者の友邦さん、そして、いつもおいしい料理を作ってくれる三代目の新平さん。大学山岳部時代から数えて約60年、本当にお世話になりました。今回が最後となるでしょうから、そのお礼参りです。

●晩年、ロッジ立山連峰で管理人をしていた文蔵さんに言われたことがあります。「これから登るのなら、これ喰って行けっちゃ」と出されたのが、なんと「鮭茶漬け」ならぬ「酒茶漬け」。酒豪だった文蔵さんらしいエピソードで、そんなことを思い出しながら雷鳥沢を降り降りした、私のセンチメンタルジャーニーでした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 951号

2024年(令和6年)8月20日発行  
発行所 公益社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビューハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり  
編集人 節田重節  
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp  
印刷 株式会社 双陽社